

## 孫のてがみ

おばあちゃん、おじいちゃん、おげんきですか——こういう書き出しで、自分もひろみ（妹）も元気なこと、このごろは幼稚園のバスが家の前までくるようになったこと、ひろみもことしから幼稚園に行くこと、このあいだ小学校で身体検査があったこと、などを書きならべ、「こんどあかいらんどせるをかってください。」とむすんである。「一がつ二十八日辻景子」と、しっかりした手で署名までしている。

長女の上の娘、わたしからみると、孫の第一号が、この四月に小学校にあがることは、むろん前からわかっており、なにかお祝いをしたいが——と、いつか家内からその母親にいつてやったことがあるが、それに対する反応が、こういう直接交渉となったものとみえる。

長女の一家は、沼津市郊外に住み、その家は、富士がちょうどその裏手からまむかいに見あげられる位置にある。この子が生まれたとき、名づけをたのまれ、最初の孫の名選びというので、

自分でも堅くなつて、いい名がうかばないのではないかと、はじめは思ったが、その父親の名の一字が「景」であり、それがたまたま北齋の富嶽三十六景などとむすびつき、日光のような明るい子であるように、といった思いもそれに加わつて「景」の文字が、案外すらすらしきまつたのである。てがみの署名で、「京」にくらべて、その上の「日」がやや大きめではあるが、いかにも山上に太陽の照りがやいていような、明かるい字面がわたしの氣に入った。

この子の母親が、高等女学校に入学した年の夏に、大東亜戦争が終つた。国内ではあるが、妻子たちと遠く離れた地で終戦を迎えたわたしは、やがて身も心も打ちのめされた有り様で、妻子のいる故郷に帰つてきた。村の駅にわたしを出迎えた子どもらの姿をみとめたとき、わたしは、この子どもたちのために、まだ生きねばならぬ、とかく自分にいきかせたことをおぼえていく。その長女が、すでにふたりの母となり、はやくも上の子は小学校へ、下の子は幼稚園へ、それぞれ進む年齢に達したのである。一片の感慨なきをえない。

さて、所望にしたがつて、あかいランドセルを送つてやらすはなるまい。